剣の物語・序章

ファインドと呼ばれる森がある。

アハーンと呼ばれる大陸の西端、西方の地と広大荒漠たる中原の地とを隔てるように生い茂る、巨大な森林地帯、それがファインドである。その裡には、恐るべき強大なる妖魅たちと、はるか古代にうち捨てられた遺物の数々が隠されている。

人々は、恐怖と神秘の支配するその森の中に分け入り、広大な領域にいまなお眠る富と知識と力とを求めて、探索と、それにともなう危険の中に身を置く日々を送っていた。

彼らはいつの頃からか、〈山師〉と呼ばれるようになっていた。たしかに、その名の通り、彼らは一夜にして巨万の富を手に入れる可能性と引き換えに、時として生命さえ代償として差し出さねばならない暮らしを送っていた。

それでも、山師として生きる人々はけっして少なくはなかった。すべてを失い、山師として生きる以外ない人間もあれば、山師として生まれついたかのような、根っからの冒険者たる人物もあった。

ともあれ、それぞれの人間が、それぞれの思惑や事情でファインドの森に分け入り、そうして、相当数の人々がこの森から出ることなく暮らすようになっていた。

テルミハという名の集落も、そんな人間たちが集まって作り上げた、森の中の居留地のひとつ

(c)日下部　匡俊

である。森林の中でも、このあたりは比較的モルアレイド海岸諸国に近く、危険な生物や遺跡も少ないために、外部の人間も往来し、商売や取り引きを行っている。

このあたりで最大の集落は、いや、事実上町といって差し支えないが、テルミハの西に十リー（一リーは約四キロメートル）ほど離れたケセルという場所で、ここには常設の市もあったし、南部の商人たちが何軒か出店を構えているほどだった。

このケセル町への奥地からの中継地として、テルミハの集落にも少なからぬ人間の出入りがある。他所者の顔を見かけるのは、けっして珍しいことではなかった。

とはいえ、その旅人のなりは、いささか人目を引く出立ちではあった。集落の入り口に姿をあらわしたその男は、亜熱帯に属するファインド森林の中で、まるで北辺の地からやってきたとでもいうような分厚い外套を身にまとっていた。荷役の畜獣を連れているでもなく、手持ちの荷物もほとんど見当たらなかったが、これは、ファインドの森を旅するにしては、あまりにも無謀としか言いようがなかった。なにしろ隣のケセルまで直線で十リーあるのだ。徒手空拳で歩くには、あまりにも長い距離だった。

だが、なによりも目を引いたのは、その男の背負った巨大な剣だった。おそらく、柄頭から切っ先までの長さは、男の身長なみかそれ以上あるだろう。飾り気のない柄と鍔はさして大作りではなく、鞘の太さからも、刃の幅は一リット（一リットは約四センチメートル）かそこらしかないことがわかるが、それでも、剣の重みはかなりのものがあるだろう。その剣を鞘に取り付けた

(c)日下部　匡俊

太い革帯で、外套の上から左肩の側を上にして斜めに背負っているのだ。

木々の入り組んだ密林の中で、こんな武器がまともに使えるはずもなく、したがって大剣を持ち歩くその男の姿は、いやがおうにも目立つこととなった。

さして広くはない集落の広場の端で、ぼんやりと丸太や手作りの床几の上に腰かけていた男たちの視線が、いっせいに男の上に注がれる。

だが、男のなりについて言葉を発する人間はいなかった。ややあって、人々は男から興味がまるきり失せてしまったかのように視線をそらしていた。

ファインドに暮らす人々は、その大半が外でのしがらみを嫌って流れてきた人間である。詮索好きは嫌われたし、詮索を好む人間も少なかった。さしずめ、物好きな行商人か商人の使い走りをしている番頭かなにかの護衛に雇われた、道場剣法の使い手かなにかが、野盗あたりに襲われて命からがら逃げてきたのだろう、と、あたりをつけ、彼らはそれ以上大剣の男のことを考えるのをやめたのだった。

男は足を引きずるようにして、森の中に切り開かれた集落の中央の広場を横切ると、入り口からちょうど対面方向にある丸木で組まれた建物へ向かっていった。集落で一番目を引くその建物が、酒房と宿を示す簡単な記号を記した看板を下げていることを見て取って、男は安堵したようにうつむき、無精髭の浮いた口もとからふうっと息を漏らした。

目の前の扉を押し開くのも大儀そうに、酒房の戸口をくぐって中に入ると、男は帳場の向こう

(c)日下部　匡俊

で食器を磨いている大柄な男に声をかけた。
「――すまない、なにか飲むものを」
白髪の男は、大剣を背負った人影を、片眉を吊り上げて見返したが、しゃんと背筋をのばしてよく通る声で答えた。
「ウチにはあいにく安麦酒（ビール）と二日酔い保証付きの蒸留酒、それに少々青臭い水しかないんだが、どれにするかね？」
男は眉毛までが真っ白で、遠目にはなにも生えていないように見えた。それが、いかつい顔つきとあいまって、あまり穏やかとは言えない面相を作り出している。とはいえ、答えた声音はどちらかといえば朗らかで、どこか諧謔の調子を含んでいるように感じられた。
「こら、マスガン！　おめえ、持ち金がねえからって、食い逃げで役場に突き出すかわりに店の仕事をさせてやってるってのに、商売の邪魔になるようなことを言うんじゃねえ！」
横合いから不機嫌そうにどなって立ち上がったのは、太鼓腹の初老の男だった。背は低いが、髪の毛はまだ黒々としていて、活力にあふれた顔つきをしている。男は顔をしかめ、マスガンと呼んだ白髪の相手をにらみつけた。
「おいおい、ひどいなあ。おれは客が後で文句を言ってあんたを困らせたりしないように、最初から釘を刺してやってるだけなんだぜ」
にやりと笑って、マスガンは食器と布巾を手にしたまま両腕を広げて見せる。髪の毛は白いが、

(c)日下部　匡俊

年齢はそれほどでもないように思えた。皮膚はぴんと張っていて、目尻にも皺は見えない。年齢を言うなら、マスガンに文句を言っている男の方がよほど年かさだった。

だが、大剣の男は、ふたりのやりとりにも構わず、言葉をはさんだ。

「なんでも構わない。それと、なんでもいい、食べ物をくれないか」

ほとんどうめくように言って、背中の大剣を下ろそうともせず、どさりと手近な卓子の前に座り込む。普通に考えれば邪魔になりそうなものだったが、男はいっこうに意に介していないようだった。

「なんでも構わない、ね」

つまらなさそうに言ってから、マスガンは下を向いて手もとを隠す衝立の向こうで、なにやらきぃきぃわめくものを引きずり出し、押し付けるしぐさをしてみせた。大剣の男がぼんやりとした目を向けたのを確認すると、にやりと笑って右手に取り上げた短刀を思い切り振り下ろす。

酒房には酔い潰れた客が二、三人と、札遊びに興じている男が三人ほどいたが、卓子に突っ伏した人間以外は、マスガンの手もとから響いた絶叫を耳にしても、やはりにやにやしているだけだった。

ただひとり、店主らしい年かさの男だけは、渋い顔をしている。

マスガンはちらと相手の表情を見やってから、男が眉ひとつ動かしていないことを知ると、不満げに鼻を鳴らしたが、そのまま目にも留まらぬ手さばきで、手もとのなにかを切りさばき始め

(c)日下部　匡俊

た。

それを見つめる男の目が、ほんのわずか見開かれる。マスガンはほんの少し、自慢げな笑みを口もとに上らせながら、でこぼこした不格好な陶器の皿に、赤黒い得体の知れない切り身を盛って、これまた不格好な陶器の酒杯にすくい取った麦酒を左手に持ち、帳場を回って男の席へと近づいて来た。

「これでいいか？」

マスガンの言葉に男はうなずくと、赤黒い不気味ななにかを直接手づかみで口の中にほうり込んだ。

「……それがなんなのか聞かないのかよ？」

大剣の男は首肯した。

「味は悪くない。もっとも、なにかの生肉だと信じ込ませるには、ずいぶんと青臭い代物だが」

マスガンは短く舌打ちした。

「ちぇ、なんだバレてたのか」

男がどうするかにじっと注意を傾けていたその場の男たちは、そこで一様につまらなさそうにその場から目を切った。全員、およそこのあたりに似つかわしくない風体のその男が、マスガンの料理に音を上げて逃げ出すか、無理に食べようとしてえづくのを期待していたらしかった。

「本当に、なにか生きているものをさばいているのかと思わせる手際は見事なものだったが」

(c)日下部　匡俊

このあたりでは生肉の実と呼ばれる果実を、さらに口の中に押し込みながら、男はマスガンを見上げてそう答えた。そうして卓子に置かれた酒杯の把手を持ち、ぐいとやってからふうっと息を吐き出した。

「なるほど、ひどい味だ」

「なんでえ、つまんねえ」

マスガンの言葉に、男は不思議そうに首をかしげた。マスガンが斜に見返しながら続ける。

「最初からわかってたのかよ」

男は無言でしばらくもぐもぐやっていたが、ややあって言った。

「気づかない振りをしていた方がよかったか？」

マスガンは長々と男の顔を見返してから、ふてくされたように言った。

「くそ、手先の技には自信があったんだがな」

「客をもてなすにしては、変わった趣向だな？」

「ここじゃあ、新顔は度胸試しをすることになってるんだ。楽しめていただけたなら幸いだよ」

マスガンはそう言って相手に背を向け、なおもにらみつけている店主らしい男に向かって片目をつぶって見せてから、帳場のむこうへもどっていった。

「すまねえな、あんた」

かわって口を開いたのは、その店主であった。

(c)日下部　匡俊

「悪い連中じゃあないんだが、ここでは娯楽が少なくてな」
男は黙って生肉の実をほおばりながら、主人の言葉にうなずいて見せた。
「ついでに、場違いな大剣と貴族が着ていそうな暑苦しい外套を着けた野郎もな」
誰かが笑いながら茶々を入れる。主人がにらみつけると、笑い声はやんだ。
「どんな相手だろうと、払いさえしっかりしてくれれば上客だ。もちろん、わかってもらえると思うがね」
いくぶんこわばった顔で主人は笑いかけた。言いながら、この男も他の客たち同様、料金を踏み倒すのではないかということに思い至ったのである。
「金はない――」
主人の表情が一変した。マスガンがぶっと吹き出す音が聞こえる。
「金はないが、物でいいなら取ってくれ」
言うや、男は黒い革の鞘におさまった見事な短剣を懐から取り出した。円筒形の柄は、それを取り巻くように螺旋状の精巧な筋彫りの施された金属製で、錆のかけらも見せずつや消しの銀色に光っている。柄頭は抜け止めに一段太くなっているが、それもひと回り太い円筒で、ここには縦方向に等間隔で幾本もの筋が彫ってあった。筋の間にはきらきらと輝くとりどりの色の小さな宝石がはめ込んであって、その周囲にはほとんど見た目にはわからないほどの細さで縁取りの筋が彫ってある。

(c)日下部　匡俊

鞘から出ているその部分を見ただけで、主人はぶるぶると首を振って卓子の上に戻した。
「勘弁してくれよ。あんたはこの店ごと買い取るつもりか？　たかが食い物ひと皿と麦酒一杯で、こんなとんでもないものをもらうわけにはいかん。銅貨一枚も持ってないのか？」
「財布は、持ってくることができなかった。これがだめなら……さて、どうしたものか」
主人は店を仰ぐしぐさをすると、くるりと回れ右して、いままで座っていた椅子にもどっていった。
「まったく、どうしてウチにはこんなのばっかり来るのだか」
「いいじゃねえか、親父さん、稼いだら、一番に親父さんのところのツケ払って、ぱーっと豪遊してやるからさ」
にやにやしながらマスガンが言うと、酒房の主人は青筋をたてて席から腰を浮かせた。
「てめえ、踏み倒しの権化みたいなやつが、そういうことを言うんじゃねえ！　だいたい、てめえはせっかくのお客を追い返すような真似はするわ、帰らない客だと思えば、とんでもねえのばかりだわ」
言いながら、目をむいて大剣の男を見る。男は意に介していないようで、なおも残り少なくなった赤黒い不気味な果実の切り身を食べていた。
主人はいったん言葉を切って――というより一瞬絶句して――続けた。
「おまえが土下座して頼むから、ツケを払うかわりにそこに立たせてるんだぞ！　おまえ、その

(c)日下部　匡俊

ことを忘れてないだろうな」
「もちろんですよ、親父さん」
マスガンは媚びるような笑みを浮かべて、腰を折りながら揉み手をして見せた。主人はなおもなにか言いたそうにしながら、口をぐっとつぐむと、鼻でふーっと息をついて腰を下ろした。
と、不意に表が騒がしくなった。がしゃん、がしゃんと鉄の打ちつけられるひどく重い音とともに、しゅうっと蒸気の吹き出す音が同時に響いてくる。地響きにも似た振動を感じて、いままで酔いつぶれていたらしい男たちまでが目を覚まし、のろのろと顔をあげた。
「おい、ありゃあ操兵じゃないか？」
誰かがそう叫ぶと、その場の全員の目が窓の外に向けられた。大剣の男も、ちらと背後を見たが、無関心そうにふたたび皿の上に視線をもどす。
そこにあったのは、ガレ・メネアスの名で知られる操兵――〈従兵機（バイカー）〉という下級のものではあったが――が大きな長柄の鉈を手にしたままひざまずく姿だった。そのまわりを数人の男たちが忙しげに動き回り、うねうねと波打つ髪を肩まで垂らしたやぶにらみの髭面の大男が、地面に降り立つのを手助けしている。
「おう、親父、酒だ！　なんでもいい、上等なのをありったけ持ってこい」
髭面は先頭を切って店に入ってくると、下品に笑いながら大声でそう呼ばわった。その男から漂ってくる臭いは、それほど清潔とは言えない酒房の中でも、思わずむせ返りそうなものだった。

(c)日下部　匡俊

よく見れば、長い髪の毛はくせっ毛なのではなく、垢でこびりついてもつれ合ったものなのだった。

「女も連れてこい！　何人でもいいぞ、金はいくらでもある！　なにしろ、ケーツンヅの森の奥で、封じられた城砦を見つけたんだからな」

懐から取り出した革袋には、たしかにどっさりとなにか重いものが入っているらしかった。

渋面で立ち上がろうとする主人を目で制して、マスガンがにこにこしながら揉み手で前に出た。

「これはこれは旦那、そのご様子じゃあ、大漁だったようですね」

髭面は、マスガンの顔を見ると、急に不機嫌な顔になって言った。

「おべっかなんぞいらんわ。酒だ！　それに女だ！　とっととしやがれ」

マスガンはその凶相に不釣り合いな笑顔を浮かべて、大きく腰を折った。

「さっそくご用意いたしますです。ですが、旦那、なにぶん、こんな場所でして、女の方はご満足いただけるようなタマがおりませんで……」

そう、マスガンが言いかけた時だった。裏の木戸を開いて、白い外衣を身につけた黒髪の女が入ってきたのは。

年齢のころはほど若く、見たところせいぜい二十歳をいくつも過ぎていないといったところだった。肩までで切り揃えたつややかでまっすぐな黒髪は、黒檀のようで、わずかに褐色がかった肌はなめらかでしみひとつ見当たらなかった。

試読用

(c)日下部　匡俊

目が比較的細い印象があったが、それはこの女の美しさを損なうものではなかった。むしろ、謎めいたその表情には、どこか蠱惑的な雰囲気さえ感じられる。

「どうしたの、マスガン」

女は抑揚に乏しい声で言った。マスガンの前に立つ不潔な髭面の山師を目にしても、眉ひとつ動かさず、静謐な表情を浮かべたままだった。

「てめえ、ぶち殺すぞ？　こんな上玉がいるじゃねえか」

マスガンを押しのけ、髭面が女に向かって前に出る。

「……ああ、いやしかし、そいつは」

「野郎ども、今夜はこの女の酌で飲み明かすぞ！」

髭面は女の手首をつかむと、入り口に押し寄せた五人ほどの仲間たちに向かって怒鳴った。その息は鼻をつまんでも耐えられないほどのものだったが、その仲間たちの漂わせる香ばしさもなかなかのものだった。男たちが腕を突き上げ歓声を上げると、たまらず、札遊びに興じていた男のひとりがげええと音をたてる。

「誰だ？」

髭面があたりをねめ回す。声を発した当人はとっさに口もとに両手をあて、卓子の上に突っ伏している。髭面はつかつかとその男のところに近づいて、襟首をつかんで引きずり起こす。

「ああ、おまえか？　なんだ、なにか文句でもあるのか？」

(c)日下部　匡俊

たまりかねた店主が、席を立って髭面に向かって作り笑いを浮かべながら言った。
「すいません、旦那さん、なにせ、ここは場末の飲み屋でしてね、酔っ払いにはことかかないんでさ」
髭面は床に向かって唾を吐き捨てると、店主の顔をにらみつけた。
「余計なことは言わねえこったな。そうでなくても、オレたちは長いこと女と酒に飢えてるんだ。すこしばかり気が立っててなあ」
言いながら、髭面は腰の剣の鯉口を切って見せる。
「いやその、そういう物騒なものは、どうぞお収めくださいまし。ここは外のことは忘れて、飲み食いしていただく場所で――」
店主は、その言葉を最後まで発することができなかった。鼻面に、髭面の拳が食い込んだからである。それなりにがっしりとした体格の店主が、転がるように吹っ飛んでいた。
「客に指図するたあ、ふてえ主人だ！　金を落としてもらいたいんなら、少しは腰の低さってものを学んだ方がいいなあ」
鼻と口もとから血を流し、よろよろと立ち上がる主人に向かって、髭面の男はげらげらと声を上げてあざけり笑った。
「やれやれ、こりゃ困ったな」
ぼりぼりと頭をかきながら、マスガンが主人に向き直った。

(c)日下部　匡俊

「どうします？　たしかに金は持ってそうですが、もう少し我慢しときますか？」
ふらふらと頭を振り、主人が顔をあげる。
「……店に傷をつけられちゃ困る」
「なるほど」
マスガンの顔に邪悪な笑みが広がった。
「野郎！」
気色ばんだ男たちが、いっせいに得物を引き抜いた。ひとりが大振りの槌を構えている以外は、全員刃渡りの短い鋭利な剣を抜き放った。ファインドを放浪する山師には必須と言っていい、狭いところでも取り回しが楽で、振り回すよりも突くための武器である。
髭面はただひとり武器を抜かず、女の手首をつかんだままマスガンを見返している。
「まるで、てめえひとりでおれたちを片づけそうな勢いだな」
「勘弁してくれ」
マスガンは、苦笑まじりに天を仰ぐしぐさをして見せた。
男たちが下卑た笑いを上げる。
「おれは、おまえたちを助けてやろうってんだぜ」
「あ？」
「おまえら、本気でその女と呑むつもりなのか？　やめといた方がいいぞ。そいつの機嫌をそこ

(c)日下部　匡俊

ねたら、どうなるかわからない」
髭面が目を細める。
「なに言ってんだ、おめえ？　ああ、そうか、その女はおまえのコレか？」
言いながら、小指を差し出した男に、マスガンは迷惑顔でかぶりを振った。
「ああ、やめてくれ。いまはそういう話をしてるんじゃない」
「あら、そういうことを言うの？」
ごく静かな声で、マスガンがシェーラと呼んだ女が言う。まったく表情は動かなかったが、マスガンに向けられた視線はひどく冷ややかだった。
マスガンの表情が、にわかにこわばる。
「……まずいなあ」
「なにがまずいだ！　この白髪頭のマヌケが、よりにもよってこんな時に痴話喧嘩とはな」
そう言って笑ったとたん、髭面の男は、なにか熱いものにでも触れたかのように、つかんでいたシェーラの手首を放していた。
「な、なんだ、びりっときたぞ？」
シェーラは静かな顔で髭面を見返すと、やはりまったく変わらない表情のまま小さく首をかしげた。
「ああ、おっさん、悪いことは言わないから、さっさとそいつから離れた方がいいぞ。いますぐ

(c)日下部　匡俊

黒焦げになってみたいっていうなら別だが」

マスガンの言葉に、髭面はかすかに眉をひそめたが、警戒するように目をやりながら、ゆっくりとシェーラから身を離していった。

「そうそう、それがいい。あとできっとおれに感謝したくなると思うぜ」

「吐かせ！」

髭面の仲間である血の気の多そうな若い男が、そう叫ぶや腰だめに小剣を構えてマスガンに突進した。

「店を壊さんでくれ！」

「わかってますって」

マスガンは肩越しに店の主人を振り返って、困ったように答えた。そこへ、小剣を突き出した若い男がまともにぶつかってくる。マスガンの巨体の陰になって、男の構えた小剣は見えなかったが、位置関係とその勢いから、どう見てもマスガンが腹部を貫かれたようにしか見えなかった。

「あーあ。だから言わんことではないな」

髭面が、にやにや笑いを浮かべて主人を見る。

「なにが言わんことではないって？」

マスガンが、肩越しに平然と髭面の顔を見る。その表情には、腹を貫かれた苦痛の色は微塵も見えなかった。

(c)日下部　匡俊

「こいつ……」

低くうめく髭面の目の前で、マスガンは右脚を一歩引いて半身の姿勢になると、小剣の柄をしっかと握った右手を見せた。持ち主がいくらうなり声を上げても、小剣は、マスガンの受け止めた位置からびくとも動かなかった。小柄の相手とはいえ、十分に勢いがついた突進を、右腕一本で止めて見せたその膂力はいかばかりのものがあろうか。

マスガンは片眉を吊り上げ、物問いたげな視線を店主に送ってから、小剣を握った手首をひねって相手を戸口に向かって放り投げた。その軌道上には、件の大剣の男が座っている卓子があったが、男は首を傾けただけで、逆さまになって飛んできた相手をかわしていた。

声を上げることもなく、若い男は宙を舞ったまま入り口を通り抜け、地面に落ちて大きく弾み、ごろごろごろと転がってそのまま動かなくなった。

「や、野郎！」

顔を青ざめさせた髭面の仲間たち四人が、武器を構えたまま、仰向けのまま動かない仲間とマスガンの顔を見比べるように、落ち着きなく視線を動かしている。

「安心しろ。骨は折れただろうが、死んじゃいないさ」

うう、と倒れた男がうめくのを見て、ようやく安心したのか、四人はふたたび武器を持つ手に力をこめ、マスガンに向き直った。

「……まだやんのかよ」

(c)日下部　匡俊

奪い取った小剣を手の中でもてあそびながら、マスガンは小さく天を仰いだ。
「なめやがって！」
言葉とは裏腹に、男たちはすっかり及び腰だった。それでも、彼らは武器を下ろそうとはせず、マスガンを取り囲むようにじりじりと移動している。
と、その男たちの目の前に、音もなくシェーラが進み出ようとする。マスガンは大げさにため息をついて、彼女の前に身体を滑り込ませた。
「シェーラ、おまえはいいから、あっち行っててくれないか？」
シェーラは、マスガンの背に向かって小首をかしげて見せる。
「話はあとでしよう。いまは、とりあえずおれに任せてくれよ」
困り顔で答えるマスガンに、シェーラは納得したのか、やはり滑るようにその場を退いた。
「そうね、あとにしましょう。楽しみにしてるわ」
玻璃を打ち鳴らしたかのような澄んだ声が、平板な調子で言葉を紡ぎ出す。それだけでは、果たしてシェーラがなにを考えているのか、はた目にはまったくわからなかったが、マスガンの反応を見れば一目瞭然だった。
「あ、ああ、あとでな」
「ば、ばかにしやがって！」
髭面が、声を震わせ、怒りといらだちをあらわにしながら、腰の長剣を引き抜いた。それが合

(c)日下部　匡俊

図のように、残りの仲間たちがいっせいに飛びかかってくる。

勝負は一瞬だった。がっしりとした禿頭の男が振り回していた槌が酒房の天井に食い込み、卓子がひとつ、椅子がみっつばらばらになったものの、それ以上の被害はなかった。板張りの床には、身体のどこかをへし折られた人間がふたりほど転がってうめいており、窓を突き破って上半身だけを外に突き出しているのがひとり、そして、最後のひとりは最初の若いやつとおなじ運命をたどっていた。

信じられない面持ちで、ことの成り行きを見ていた髭面は、低くうなりながら長剣を下段に構え、鋭い足運びでマスガンに迫った。それなりの使い手だった。すくなくとも仲間の連中よりはよほどましだろう。

だが、その程度だった。マスガンは相手が長剣の間合いに入ってきたとたん、一歩踏み込み、相手の剣の鍔の部分を握って、袈裟懸けに肩口から小剣でないだ。その攻撃を予想していたか、髭面は長剣をぱっと手放すと、マスガンの目に向けて口から唾を放った。

奇襲はなんとかかわせたものの、そのせいで、マスガンの反応がひと呼吸遅れていた。その隙に、髭面はこけつまろびつ、酒場の出口をくぐって逃げ出していく。

拍子抜けして背中を見送ったマスガンは、しかし、相手が単にこの場を逃げ出したわけではないことに気づいた。

「操兵か！」

サンプル

(c)日下部　匡俊

言い捨てて後を追うマスガンは、突然表から響いた蒸気の激しく吐き出される音と、重い鉄がこすれる音を聞いていた。

果たして、先刻まで酒房の前でうずくまるように膝を落としていた武骨な箱形の機体（ガレ・メネアス）が、もうもうと蒸気を漂わせながら、その身を起こそうとしているところだった。それが人の形を模しているとするなら、その頭部と言うべきか、首の付け根があるはずの胴体の上部から背中にかけての場所にぽっかりと開いた空間に座して、そこに据え付けられた槓桿やら弁やらをさかんに操作している人影が見える。まぎれもなく、例の髭面だった。

髭面は、戸口のそばに立つマスガンを横目でにらみながら、自分のすぐそばに突き出た喇叭状の筒に向かって大声でがなった。

『こうなりゃ、その汚ねえ小屋もろともたたきつぶしてくれる！』

その操兵は、従兵機と呼ばれるいわば簡易型の機体――本来の操兵は、頭部を持つ完全なる人型に近いものだった――ではあったが、それでも、その膂力をもってすれば酒房をこなごなに打ち砕くことは容易だった。

「おい、仲間はどうすんだよ、おっさん」

マスガンの言葉も、しかし、操兵を起動する騒音にかき消されて相手には届かなかった。もっとも、マスガンへの恐怖と怒りで血が頭に上った髭面が、はたして言葉を聞くことができてもまともに反応できたかどうかははなはだ疑問ではあったが。

(c)日下部　匡俊

「……しょうがねえなあ」

右手に髭面の置いていった長剣、左手に小剣を握り、それぞれを左右に広げるように構えて、マスガンはゆっくりと戸口の階段から地面に降り立った。

『おう、出てきたか！　いい度胸だ』

ごうっと風の渦巻く音とともに、従兵機に特徴的な長細い腕がマスガンの頭上にたたきつけられる。マスガンは素早く動いてその攻撃をぎりぎりでかわし、地面に食い込んだ三本の指しか持たない手先に足をかけて一気に駆け上がった。

『くそ、このすばしこいやつめ！』

左腕の上のマスガンに向けて、横殴りに鉈を握った操兵の右腕が襲った。マスガンは、とっさに操兵の腕に両脚を絡みつかせ、そこをささえにぐるりと腕からぶら下がって攻撃をかわすと、ふたたび身を起こして、この機体の特徴である開放された操手槽――操り手、つまり操手が機体を操るために収まる場所を操手槽と呼ぶ――に向かって飛びかかった。

従兵機、つまり簡易型操兵であるガレ・メネアスであろうと、機体を覆った分厚い鉄の外装には、もちろん人間の使う武器など通用するはずもない。いわば、外部に開放された操手槽は、この操兵にとって唯一の弱点と言ってもいい場所だった。

ガレの左肩を蹴り、剣を掲げて舞い上がったマスガンを、髭面の顔が見上げた。その目は驚きに見開かれていたが、同時にその顔に浮かんだのは、狡猾な笑みだった。

(c)日下部　匡俊

操手槽を守る巨大な鉄の胸板のむこうから、ひょろりとした人影が姿を見せる。人影の顔には、素焼きのような素材でできた仮面があてられていた。

「くそ、しまっ――」

仮面の男が、組み合わせた両手をマスガンに向かって突き出した。見えない衝撃が空中のマスガンを捉える。とっさに防御の姿勢をとったおかげで、骨が砕けることだけは避けられたが、マスガンは大きく後方へ数リート（一リートは約四メートル）吹っ飛んで、木立の中に突っ込んだ。

「ばかが！　引っかかりやがった」

髭面が、操手槽で高笑いを見せる。仮面の男は冷静な声で言った。

「……だが、まだとどめをさしてはいない。見たところかなりの使い手だ、ここで片づけねば、わたしがいても危険な相手かも知れない」

「ああ、そうかも知れねえな、バローゾ。やってくれるかい？　こいつ（ガレ）でぶん殴ってもいいんだが、あのすばしこさだ、見失う危険も大きい」

バローゾと呼ばれた仮面の男は、ひとつ重々しくうなずくと、指を絡め合わせる仕草とともにふわりと宙に浮かび上がった。

「さあて、おれは心置きなくあのくそいまいましい酒場をぶち壊してくれるぜ」

髭面は拡声器に顔を向け、ふたたびどなった。

『おい、野郎ども、とっとと出てこい！　出て来なけりゃ、その小屋ごとぶっつぶすぞ』

(c)日下部　匡俊

その声と同時に、先客たちが大慌てで逃げ出していく。仲間たちも肩を貸し合ってよろよろと戸口から姿を見せ、さらにその後から、ひどく場違いな格好をした大剣の男がゆっくりと進み出てくる。

「なんだ？」

他の客たちがガレ・メネアスを目にしたとたん、あわてて左右に散っていったのに対して、その男は、まっすぐこちらを見据え、ゆったりとした足取りで向かってくる。左肩の上に突き出た長い柄に掲げた左手をあて、ぐっと引き下げるのが見えた。割れ目の入れてあるらしい鞘の中から、つや消しの黒い刀身がのぞく。

「おいおい、まさかそんなもんでこいつとやろうってんじゃないだろうな？」

操兵の外装は、この簡易版と言われる従兵機のガレ・メネアスでさえ、人間の武器で打ち破れるものではなかった。とはいえ、この男が、いまのマスガンなみにすばしこくないという保証はどこにもなかった。操兵の機体伝いに攻撃されないよう、武器である長柄の鉈を両手に握らせ、距離を置いて身構えさせる。同時に、常に操手槽の中に隠してある連装の弩弓を取り出し、右手に握った。

「はっは、悔しかったら、そのたいそうな剣でこいつを止めてみるんだな！」

髭面は高笑いすると、連装弩弓を銃眼に据え、大剣の男を狙って引き金を引きながら、同時に鉈を大きく振りかぶらせた。足踏桿を踏み込み、体当たりと同時に小屋を打ち砕く。

(c)日下部　匡俊

その腹積もりだった。

「なるほど、だてに奥の遺跡を荒らしてたわけでもなかったか」

木立の枝の途中に引っかかった格好で、マスガンはかぶりを振り振りそうつぶやいた。

この危険な森の中で生きていくためには、練法師などの術師と呼ばれる連中の力が不可欠である。もっとも、操兵があればそれなりに危険を回避することも可能だったし、術師の数はごく限られていたから、術師の力に頼らない人間も少なくはなかったが。

特に、あのバローゾのような練法師と呼ばれる連中には変わり者が多かった。ひとりだけ店に入ってこなかったのも、おそらく興味がなかったからだろう。この場合、それが相手に有利に働いたわけだが。

「まったく、だから練法師は嫌いなんだ……しかし、こっちに気配を感じさせなかったとは、なかなか使うやつのようだな」

例のバローゾとかいう男が近づいてくる気配があった。マスガンはなんとか手放さないですんだ剣で枝を叩き切ると、そのまま地面に滑り落ちるに任せた。

「いたな！」

先刻食らった衝撃波が、わずかにそれた場所に命中する。飛び散る木っ端にも構わず、マスガンは剣を構えて前に出た。

(c)日下部　匡俊

練法は次を放つまでに時間がかかる。その間に一気に倒す算段だった。
だが、バローゾの前に躍り出たマスガンは、突き入れた小剣が相手の手前わずか数リットの場所でびくとも動かなくなったことに愕然となった。
「くそ、〈障壁（ザーム）〉張ってやがる！」
バローゾは小首をかしげて見せた。
「なにを驚いている？　このようなこと、当然の備えではないか」
くく、と喉を鳴らし、バローゾはふたたび力のうねりを帯びた掌を突き出した。
「この距離で食らえば、いかにおまえでもばらばらとなろう……」
マスガンの眼前で、分厚い鉄の甲冑さえ打ち砕こうかという衝撃波が炸烈した。
だが、依然としてマスガンはその場にたたずんでいた。バローゾの喉から、くぐもったうめきがもれる。
「……使いたくなかったんだよなあ、これだけはさ」
バローゾの目の前に立っている相手の顔には、複雑な紋様の描き込まれた石の仮面があてられていた。前頭部を覆う部分からはかんざしのように細長い突起が左右に張り出し、顎を覆う部分は、前方にしゃくれたように大きく長くのびている。明らかに石でできているように見えるにもかかわらず、その仮面は複雑に表情を変えているように感じられた。
「な、なんだ、それは……なぜ、そんなものが、おまえの顔に」

(c)日下部　匡俊

「しょうがないだろ、おまえが障壁なんて使うからなあ」
マスガンの答えは、バローゾの問いからずれたものだったが、結局、彼はその言葉がいかに的外れであるかを相手に指摘することはできなかった。
マスガンの背後に、おびただしい数の赤い色をした光の矢が浮かび上がる。
「そ、そ、それは、〈赤き矢〉！」
「おや、知ってたのか？　だったら、やる前にちゃんと相手の素性を確かめておくべきだったな」
マスガンの言葉と同時に、実体を持たない矢の群は、いっせいにバローゾに向かって襲いかかった。次の瞬間、仮面を打ち砕かれ、白目をむいたバローゾは、声もなくその場に昏倒した。
相手が完全に無力化したことを確かめると、マスガンは顔を覆った仮面の上を、小剣を小脇にはさんだ左手でつるりと撫でる。どこにどう隠したのか、その顔から仮面は消え去り、物思わしげに眉をひそめたマスガンの素顔がふたたびあらわれた。
「誰にも見られなかった……とは思うが、ここも潮時かも知れないな」
そうつぶやいたマスガンは、ただならぬ気配に思わずその方向に顔を向けていた。
「なに」
マスガンの目に最初に飛び込んできたのは、漆黒の剣だった。いかに刃を焼いて黒鉄色に仕立てたとしても、あれほどまでに黒くはあるまい。その刃が、向かってくるガレ・メネアスに黒い軌跡を描いて振るわれる。

サンプル

(c)日下部　匡俊

「ばかな、踏みつぶされるぞ！」

黒い剣の使い手は、あの大剣の男だった。男は、剣を振るったままの姿勢で、突進するガレ・メネアスの前から一歩も動こうとしなかった。

あわや、ガレの巨体が男を押しつぶさんとした刹那、全身から蒸気を吐き出しながら、従兵機の巨体は分解を始めていた。腕が落ち、胸板が袈裟懸けに切断されて滑り落ち、そして、膝のあたりから切り離された機体は、なおも細片に分かれながら男の頭上を通過して、建物のほんの数十リット手前で崩れ落ちた。

短い沈黙があった。

マスガンにわれを取り戻させたのは、男が剣を鞘におさめる時にたてた、乾いた鍔鳴りの音だった。

「な……なんだ、あれは」

自分では、それなりの腕だと思っている練法師としてのマスガンにも、あの黒い剣の気配はわからなかった。すくなくとも操兵の機体を覆う分厚い鉄をたやすく斬り裂ける類のもので、練法師の超感覚に引っかからないものがあるとは思えなかった。いや、引っかからないどころか、あれが威力通りの魔剣だったとしたら、この集落に近づいてきただけでマスガンはその圧倒的な存在感に打ちのめされていただろう。それはシェーラもおなじことだろう。ああやって、平然とあの男の目の前に出てくることなどできなかったはずだ。

(c)日下部　匡俊

だが、現実にあれはマスガンの目の前で操兵をばらばらに引き裂いて見せ、しかも、魔力の閃きは一片たりとも感じさせなかった。

「では、あれはあの男の技か？　まさか、そんなことがあるはずが」

〈気功〉使いならば、確かに似たようなまねはできるかも知れない。だが、〈気〉の力は、やはり練法師の感覚にはなじみ深いものだった。

大剣の男は、マスガンの姿を見つけるとゆっくり歩み寄ってきた。

「大丈夫だったか。吹っ飛ばされたのを見た時には、無事を疑ったが」

「そりゃどうも」

内心の動揺を隠しながら、マスガンはおどけて見せた。

「おまえこそ、たいした技じゃないか。生身で操兵をなますにできるやつの噂なんか聞いたこともなかったが」

男は小首をかしげ、小さく背後を振り返った。

「この剣のおかげだ。師の形見なのだ。師は錬金術師で、最後にこの剣をおれに託して逝った」

うそだ、とマスガンは内心ひとりごちた。錬金術も練法に近い技だからだ。だが、いまはそのことを問いただすには適当な時ではなかった。

マスガンはきちんと相手に向き直ると、長剣を地面につき立て、右手を差し出しながら言った。

「なにはともあれ、親父の店を救ってくれたことには感謝する。おれはマスガン。おまえは？」

(c)日下部　匡俊

大剣の男は、わずかに逡巡してからマスガンの右手を外套の下から出した右手で握り、答えた。

「名はナグン。師の仇を探して、旅をしている」

後の世に〈南部大戦〉と呼ばれる西方史上最大の戦乱の中心人物、すなわち歴史に名高い〈赤き矢〉のマスガンと、その脇にあって無敵の力を奮いながら、けっして歴史の表舞台に立つことがなかった〈剣〉のナグンは、かくして出会いを果たすこととなったのであった。

時に西方暦八三七年、歴史はその大きな転換期のとば口に立ったばかりの頃である。

剣の物語・序章　終

試供品

(c)日下部　匡俊